水上勉全集

24

水上勉全集　第二十四巻

昭和五十三年五月　十　日印刷
昭和五十三年五月二十日発行

著　者　水　上　勉
発行者　高　梨　茂
印刷者　白井倉之助
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ八ノ七
電話(五六一)五九二一
振替東京二―三四
検印廃止
©一九七八

目次

寺泊 5
太市 21
千太郎 33
棗 51
冬日帖 67
リヤカーを曳いて 81
山寺 95
踏切 121
雪みち 139

短かい旅 159
壺坂幻想 179
みかん水と棒剣 211
下駄と仁丹 227
鑛太郎 251
丹波ほおずき 267
狐 283
籾炭 301
冬の一日 315
戌の七十九歳 329
近江石山晴嵐町 341

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

ブンナよ、木からおりてこい　363
あとがき　495

寺

泊

一

よこしなぎの雪が寺泊の海岸へ降りかかる。海はよごれた灰いろで、高波は砂丘の砂をけずるせいか、褐色の長い布を吹きあげるみたいに空へ高まる。かと思うと、すぐうねりを低めて岸へ近づいてくる。岸の下にはある種の動物の裸体を思わせるテトラポッドが、遠く出雲崎の断層の方までのびている。それへあたってくだけては退き、くだけては退きしている。見ていると、緩慢なくりかえしだが、風と雪が激しくなるので、海は猛りをあきらめ、ただその荒々しい行為をつづけるだけだという表情に思えた。それにしても、なんと荒涼たる町か。海岸通りは、船小舎と製材所と給油所が表へ出ているが、あいだに、とびとびに、人家とも倉庫ともつかぬトタン屋根のひしゃげた平家が、雪囲いの茅の束をふるわせているばかりで、人影はないのだった。風のなかで啼いているのは、灰黒色の羽をひろげてむれとぶ、腹の白い海ねこだ。

ぼくは、こんなことなら、丘陵の向う側の街道をゆけばよかった、と思った。だが、運転手が給油所へ、チエンを買求めにゆく少時を、吹きさらしの海岸の製材所よこにおろされて、よかったと思いかえしていた。こんなことでもなければ、この町の冬景色にめぐりあえなかったろう。

運転手は、給油所が休みなら、役場へ廻ってチエンのある店を教えてもらってくる、といって出たが、だいぶ時間がかかりそうだった。ぼくは少し町を歩いてみようと思った。

越後へきた用事はすんでいた。国上山麓に住むS高校の教師で良寛研究家でもあるAさんが、このたび、土地の出版社から『良寛書簡集』を出した。学校の余暇に、数年の歳月を費して足で求めた、国上山かいわいの素封家や酒造問屋などに保存されていた良寛書簡を、世に問うたのだが、これがおもしろかった。良寛は一般には、山上の五合庵に住んで清貧孤独を愛し、子供と手鞠ついたり、かくれんぼしたりしてくらした、天真の人といわれてきたが、書簡の大半は、借金やら、米、味噌、薪の無心や、冬ごしの袷の洗い張りまで頼んでいて、それらの無心も人を介して持参させたものの礼状が多い。いんきん、たむしの薬の礼状もあった。七十近くまで、弟子ももたず、経もよまず、自ら大愚風来の乞食僧だといい、ただ歌をよみ、子とあそび、酒をめぐまれて、畦をまくらに寝たといわれるが、のんきな日ばかりだったわけでもあるまい。寒い冬は、戸をしめた五合庵の一と部屋では、火を焚けばいんきんにもなったろう。耕さぬ男なら米は無心にきまっていたし、年とれば薪割りも億劫だったにちがいない。Aさんの集めた書簡は、伝説の聖人を、一挙に地へおろした観があり、実像を推察させるに少なからず力があった。ぼくはかねてから、このAさんに会って仕事ぶりに敬意をのべたかったし、長年の書簡集めの苦労話もきく機会を持ちたかった。それで、Aさんの都合をたずねていたところ、学校が休みの日曜なら、学期末試験の採点もあって多忙だけれど、少時会いましょう、とこの日を指定してくれた。それでやってきたのだが、もうその用件もすんでいた。帰りは寺泊へ廻ってみようと計画したのも、一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

つは、良寛が、玉島円通寺修行後、三十四歳で姿をくらまして数年後に、飄然と出雲崎へもどり、弟にあずけていた生家へも入らず、附近の破れ堂に住んで乞食して歩いた道を歩いてみたかったからだった。ドライブインや、食堂の出来たアスファルトの本道をゆくより、多少、道は悪いけれど、寺泊へ出て、海ぞいの古道を出雲崎へ出た方がよいだろう。そう思って、運転手に廻り道を頼んだのだが、新潟からきたこの三十そこそこの運転手は、まさか、こんな大雪にめぐりあおうとは予想していなかったといい、寺泊へ入ると、すべり止めのチエンを求めに走った。

ぼくは、歩いているうち、はじめは凍える寒さに閉口していたが、歩くうちに軀がぬくもった。雪を頬にうけていると、次第に腹が熱くなった。運転手は、製材所の前でぼくに待っているようにいい、百メートルほど先の給油所らしい標示のある地点でいったん停めた様子だったが、すぐまた車へもどって、五十メートルほどいった地点で町なかの方へ折れて見えなくなった。そっちが町なかだと判断できるのは、粉雪のなかなのではっきりせぬが、家なみが混んでいるのと、火の見と、役場らしい建物がみえたからだった。町は中心あたりを百メートルぐらい家を混ませて細長く続くだけで、南の方は峻しい断崖にせばめられている。北の方も、国上からきた分水ぞいの街道は町なかへ呑まれていたから、海岸道路は二百メートルぐらいで河口へつづく砂丘の低地だった。ひねくれた小松が雪風に折れまがりかねないほどにゆれている。したがって、弥彦も角田も見えやしない。

ぼくは、出雲崎や、国上山へは二、三どきているが、寺泊へきたのははじめてだった。ここには良寛の少時住んだ寺があった。地図によれば段丘の中腹あたりにあるはずだったが、いまは、

そこへ歩をのばす勇気もなかった。製材所のわきから、岸壁へゆく道とも貯木場ともつかぬ広場をよこぎって、町と反対の岸の方へ歩いていった。

二

高波は、ぼくの背丈すれすれぐらいの防波堤へのしかかるようにうちよせる。堤のへりに手をつき、遠い出雲崎の方角を見た。何も見えやしない。ただ、もう断崖へよせる波ばかりだ。波は、地球のコブに襲いかかって、そのコブの皮をはぐみたいだ。鼠色の雪ぐもの下、なだれ落ちる山塊。錫いろの岩肌と灰色の海。よこしなぐ雪は、もう乳色にぼくの視界を染めるばかりだった。

なるほどな、とぼくは思いはじめていた。Aさんとの少時の話題が思いかえされたのだった。

「にせものもありますけれども、そのにせものにしろが、内容のおもしろさで、事実を裏付けているようですね。材料までの創作は考えられませんから、タネがあってのニセ手紙といえましょう」

とAさんはいった。眼鏡をかけた顎の細い顔立ちには、この人の律義さと、永年、地方の高校に教鞭をとる気質が出ているように思えた。

「おっしゃるように、研究者は、一次資料のみでその実像をみようとします。となると、これはどうもくせもので、歌や詩や、宗教的な述懐からあぶりださざるを得ませんね。経文や歌の世界には、たしかにきれいさはあり、澄んでもいましょう。みな建てまえの世界ですからね。しかし記録はなくても、飢饉の折りに、雀にくれてやる米などありはしない、多少は貯え米もなければ、

死んでしまいましょうに。その点、書簡をみて、自分もびっくりしましたし、はじめて生きた人間を見たように思えたんです」

ぼくが、子供とかくれんぼした良寛が、朝になっても藁のなかにいたという挿話をくさした時のこたえだった。かねがね、あのかくれんぼの話は好まなかった。ぼくの故郷の若狭などでは、農家の主婦は、朝暗いうちに起きて、その日の堆肥の準備ぐらいはひとりですませた。それは飯前の仕事であった。主婦たちはいらだっていた。かりに藁束をとろうとして、中にかくれていた良寛坊主が出てき、シッと子供らへの口封じの合図をしようものなら、横面の一つも撲りつけたろう。この糞坊主め、仕事の邪魔をするな、どなりつけたいのは人情であった。美談などであるものか。耕しもせず、法を説きもせず、檀家廻りもせず、ただ、乞食のようにほろつき歩いた坊さまを聖人だとした越後は、それだけ余裕のある米どころだったか。くわしいことはわからぬが、越後も、良寛が生きた時代は飢饉つづきで、柿崎では年貢控除の歎願で一揆が起きているし、刑死者も出ていた。餓死者は千人を越えたと、郷土誌の記録にあった。そんな時節に、子供と手鞠つきでもあるまい。もっとも高倉テル氏によると、託児所の創始者ということになっている。手鞠をついたから託児所でもあるまい。手鞠をつけぬ赤子を良寛が背負うて乳乞いしたという記録はどこにもない。新しい記録は、Aさんの書物にあらわれて、八十余種類に及ぶ生活必需品の無心状だった。かさねて羅列してみるが、蚊帳、鍋、提灯、肌着、帽子、炭、蒲団、円座、足袋、酒、煙草、あらめ、かんぴょう、くず粉、煮豆、味噌、納豆、昆布、鮒、肴、油揚、大豆……、貧民の子らが口に出来ぬ豪奢な喰い物と日用品の礼状ばかりだ。

「良寛は童貞だったとお思いですか」
ぼくはついでにきいてみた。Aさんはこの時、やわらげていた顔を教師らしくひきしめて、
「そんなことはないでしょうね」
といった。これもぼくと同意見だった。年老いてからの貞心尼との素朴な交際はいざ知らず、玉島円通寺出奔後、三十八歳ぐらいまで男ざかりをどこで何をしていたか。かりにあの天真爛漫の知足生活が、彼の悟りの境涯とするなら、苦惨と背信とで地獄を這い歩いた果ての虚無に近かろう。女を知らぬではうたえぬ消息の歌も二、三あった。
帰りしなに、家の門ぐちまで送りにきたAさんの三十前後の丸ぽちゃ顔の奥さんが、ぼくに土産だといって二個の手鞠をくれて、
「お子さんの軀の具合はいかがですか」
と次女の容態をきいた。
「ひまをみてわたしがつくったものです。試作品で包み紙もありませんが、どうぞお子さんに」
わたされた裸の手鞠は、小さいのと大きいのと二つあった。両方とも赤と青と黄の絹糸が、まぶしいほど放射状をえがいてまかれていた。ぼくが東京から電話したため、くる日もわかっていたので、奥さんが根をつめてつくって下さったものに違いなかった。それをぼくは、抱きかかえて車へ乗った。
ぼくの次女は先天性の脊椎破裂症で、重障の部類に入る障害児だった。ぼくは、この娘が誕生してまなしに、障害児施設の増設を政府に進言したり、小説の題材にしたりした。そのことで、

かなり身内の事情を世間にさらす結果になった。おそらくAさんの奥さんも、それで次女のことは知っていたのだろう。妻は、子が三歳の時に、自分の腰の骨をピース箱二つぐらい切り取って、子の骨盤部に移植した。手術は別府の病院で三年近い歳月を費した。ぼくは、この費用を稼ぐ責任があったが、自分の骨を切ってやる勇気はなかったのだ。子は母の骨をもらったことで、その骨が成育すると共に、それまではあぐらをかいたままだった状態から立つことも出来、学校へも入れ、階段は妻が背負って、廊下は松葉杖で歩けた。だが、ふくらはぎから下の死んだ部分は、嬰児のままなので、未発育な先はしめじ茸のように白いのだった。

妻は子の障害の完全快癒はあきらめていた。子もまたその覚悟で生きていた。骨を分ちあったふたりには、世間の母娘とちがった格別の絆があって、父親のぼくが立入れない雰囲気でもあった。ぼくが出来ることは、人工尿器や歩行具の取換えがしょっちゅうだから、その都度かかる病院代や、学校の費用を稼ぐ以外になかった。それで、当人たちには工夫と辛労にあけくれる日常も、傍観者の立場で創作に登場させた。このことは妻と子の反感を買った。だが、いくら反感を買っても、世間に発表した以上はもとへもどらない。ぼくの責任なのだった。

ぼくには家人の誰より、子に薄情なところがあった。この性格は、ぼくの両親のせいではなく、ぼく自身が、ぼくの中で培ったものであった。ぼくは、十歳で両親とはなれて、禅寺でくらした。十七歳まで仏道修行だったが、十七歳で寺を脱走して、それ以後、仏門に帰らず、また生家へも帰らず、今日に至った（良寛への関心もそのことによるのだが）。その間、ぼくはかずかずの女道楽もし、職業も転々してきた。子に骨をくれた妻は最初の妻でもなかった。放浪中に結婚して

別れた女に子があって、それがいまの長女である。いまの妻は、子づれ男のところへきたわけだ。長女が十歳の時だった。ぼくの家は、つまり、この長女と次女との四人ぐらしだが、次女は来年は高校に入る。両足と同時に、排便器官も死んで、一日に五どはさしかえねばならぬ人工尿器を腰につるして生きる次女。それを妻にまかせて、ぼくは一人で信州に仕事場をもち、時たま東京へ帰っても、子と妻に顔をあわせただけで、すぐ山へ帰る。いまのところ、ぼくはこの生き方しか知らない。

「越後へ行ってくるぞ」

とぼくは、こんどの旅行に出る前には、東京へ帰っていったものだ。子も妻も、べつだんの反応を示さなかった。ぼくがどこへ旅行しようが、たとえば中国へ行こうが（去年の六月に行った）、デンマークへ行こうが（一昨年の五月に行った）、気にしていないふうだった。そのように装っているのかもしれないが、ぼくの出てゆくことには馴れている。ふたりは黙って微笑するのだ。足の死んだ子にも、看護役の妻にも、デンマークと越後は同じ遠さだろう。父はそこらじゅうを旅して好きなことを書いて生きる。

Aさんの奥さんから、心づくしの二個の絹色糸でかがられた手鞠をもらって、ぼくの頭をかけめぐったのは、このような、きわめて短かい感懐であった。そういえば、ぼくは外国へ行った時はべつだが、二、三日の国内旅行では、めったに母子にみやげを買ったことがなかった。別居していることもそれに竿さした。別居していても妻子によく土産を買う人はいるが、ぼくにはそれが出来なかった。見えすいたことを嫌うわけでもないが、性分だからしかたがない。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo